

藤娘

長唄 詞章 〔一部省略〕

勝井源八作詞 四世杵屋六三郎作曲 文政九年（一八二六）初演

若紫に十返り^{とかえ}の花をあらはす松の藤浪

人目せき笠塗笠しやんと 振りかたげたる一枝は

紫深き水道の水に 染めてうれしきゆかりの色の

いとしと書いて藤の花 エエ しょうがいな 裾もほらほらしどけなく

【藤音頭】 藤の花房 色よく長く 可愛いがろとて 酒買うて 飲ませたら

うちの男松^{おまつ}に からんでしめてても さても 十返り^{とかえ}という名のにくや

かへるといふは忌み言葉

たち帰らで きみとわれとか おお嬉し おおうれし

松を植ゑよなら 有馬の里へ 植ゑさんせ

いつまでも 変はらぬ契りかいどり棲で よれつもつれつまだ寝がたらぬ

宵寝枕のまだ寝が足らぬ 藤にまかれて寝とござる

アア何としようかどうかいな わしが小枕^{こまくら}お手枕^{てまくら}

空も霞の夕照りに 名残惜しむ帰る雁がね